

(国語科)

国語科を通して 自ら学びに向かう力の育成
—説明的な文章における系統的な指導をめざして—

大阪 市立中央小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由

本校では、「心身ともにたくましく、自らすすんで学ぶ、心豊かな子どもを育てる」を学校教育目標として掲げ、教育活動を進めている。そして、「学び合う・認め合う・つなぎ合う」を大切にした学習活動、全ての児童の「わかる」「できる」「楽しい」授業をめざし、研究に取り組んできた。平成31年度からは、研究教科を「国語」とし、学習指導要領で重視されている「主体的・対話的・深い学び」という視点から、国語科指導の中核をなしている「読むこと」の指導の充実、授業改善に向けて研究を進めてきた。

その成果としては、どの学年においても、単元間のつながりを意識して教材の特性に応じた単元学習を計画したことで、第Ⅰ次で既習事項を振り返るとともに学習の見通しをもち、第Ⅱ次で身に付けた読みの力を第Ⅲ次での表現活動へ生かすことができた。すなわち、単元を通して付けたい力を育む学習を積み重ねることができた。

また、第Ⅲ次での表現活動や主に第Ⅱ次で捉えさせたい「知識・技能」「思考・判断・表現」についての評価基準を明確にしたことで、どの児童もねらいを達成することができるような毎時間の支援・手立てを充実して指導に当たることができた。その結果、単元を通して児童の学びを評価しながら、次の指導の改善、充実を図ることができた。「主体的に学びに向かう態度」の評価については、毎時間の振り返りや単元での成果物から総合的に見取った。「振り返り」において、自らの学びを自覚して自己評価できる児童も育ちつつある。

そこで、研究4年目に当たる今年度は、「知識・技能」「思考・判断・表現」に加え、「主体的に学びに向かう態度」の評価の在り方についてもより一層研究を進めることで、付けたい力を育むための支援、児童が身に付けた力を自覚して次の学びに生かすための手立てを充実させ、指導と評価の一体化を図ることができるようにする。指導と評価の一体化とは、指導者は先ほど述べた学習の評価、児童の自己評価から、指導の手立てを工夫し、授業改善を行うことである。また、児童は、振り返りによって自己評価をすることにより、「何ができたか」「次は、どのような読み方や考え方が生かせそうか」という学びに対する意欲を高めながら学習に取り組めるようになると考える。すなわち、自ら学びに向かう力の育成につながると考え、本研究主題を設定した。

2. 研究の趣旨

「何のために学習をするのか」「どのような国語の力を付けるのか」「Ⅲ次でどのような表現活動をするのか」「どのような国語の力が付いたのか」ということを、指導者と共に学習者である児童自身が自覚することが大切である。そして、そのような学びの積み重ねが「自ら学ぶ力を育むこと」につながると考える。

そのために、研究の柱①を「自ら学ぶ力を育む国語科の系統的な指導」として、以下

の図に示す二つの視点を設定し、研究を進めていくこととした。そして、研究の柱②「国語科の授業を支える仲間づくりや言語活動の充実への取り組み」や研究の柱③「授業参観、校内研修、資料整備による研究の共有化・活性化」でそれを支えるものとする。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 付けたい力に適した言語活動の設定と手立て

(1) 付けたい力を明らかにするための教材文分析

- ①文章全体の構成を考える。
- ②意味段落の役割や働きを考える。
- ③文章構成の工夫や書きぶり、論の進め方について考える。
- ④指導事項と関連する学習用語、前単元や既習内容を確認する。

(2) 付けたい力と教材の特性に適した言語活動を設定する。

(3) 付けたい力を育むための授業構想

- ①思考を促す発問づくり
- ②思考が働く書く場の設定
- ③思考を広げ・深めるための交流の場の設定
- ④児童の一時間の思考の流れがわかる板書
- ⑤学びを振り返る手立て

視点② 評価の在り方

(1) 「知識・技能」の評価及び「思考・判断・表現」の評価

(2) 「主体的に学習に取り組む態度」の評価

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 教材文分析を行い、既習事項を確認し、付けたい力を明確にして、ふさわしい言語活動を設定することができた。
- 指導者と児童が、単元の初めに付けたい力を確認し、付けたい力を確認し、付けたい力を常に意識しながら学習を進めることができた。
- 評価基準と支援の仕方を指導案に明記したことで、付けたい力が明確になり、児童がねらいに到達できるような個別の支援を充実させることができた。
- 記述の振り返りを行ったことで、児童は自己評価を通して、達成感を得ることができた。指導者は、児童の内面を客観的に評価することができた。

(2) 今後の課題

- 単元計画を立てる際に、反転学習を取り入れるなどの学習内容を精選していくことが必要。
- 個々の児童の実態に応じた支援の幅を広げていくことが、より一層「付けたい力」を児童に身に付けさせる。
- 「おおむね満足できる」(B)「十分満足できる」(A)の違いの明確化と評価基準を共有する。
- 主体的に学習に取り組む態度をみとる場面の明確化を図る。